

# 58期リレーエッセイ

閉じられた関係性の中で生きざるを得ない人たち。  
全ての人に開かれた場を創るために。

会員

谷口 太規



## Aさんのこと

年末休みに入ったある日、たまった仕事をするために事務所にいると、30代半ばの男性（Aさん）が戸を叩いた。暗い表情に、おどおどとした口調。話を聞くと、こんな話だった。

約8年前、ある貸金業者から執拗な勧めを受け、借入れをした。ところが、トラブルに巻き込まれ返せなくなってしまった。当然催告状が届く。恐くなったAさんは、翌日住んでいた東京の自宅を飛び出し、以降8年間にわたり各地を転々と逃げ回っていた。そんな生活に疲れて、数週間前に東京に帰ってきた。ところが、昨日その貸金業者から再び催告状が届いた。Aさんはいてもたってもいられず、恐る恐る事務所の戸を叩いたのだった。

8年間の不安定な生活のせいか、Aさんは実際の年齢よりも随分と老けて見えた。疲れ切った表情に色濃い不安が重なっている。

私はその債権は時効にかかっており、おそらく援用の通知を出せば解決すると考えられることなどを説明し、安心するようにと伝えたが、Aさんは不安な暗い表情を崩すことはなかった。

年が明けて扶助の審査が通ると、私は時効援用の通知を発送し、その業者から債務不存在確認書の交付を受けた。そしてAさんに再び事務所に来てもらった。

手続が済むと、それまで黙っていたAさんが訥々と、逃げ回っていた生活を話し出した。不安だった日々。安定した定職にも就けず、深夜の工場で働いていたこと。その話の後、一呼吸おいてAさんは、初めて私の目を見て、「市民には垣根の低い開かれたリーガルサービスの整備が必要だと思います」と告げ、帰って行った。

この最後の言葉を聞いて、私はハッとした。私はそういう言葉をAさんから聞くとは予想していなかった。私は驚くと同時に、人目を避けるようにして社会と最小限の接触の中で生活してきたAさんが、ささやかで

はあっても、あるべき社会への提言を行なったという、その事実に感動していた。閉じられた関係性の中で生きざるを得なかった人間が、他者へ開かれた場について語ったこと、そのことがとても嬉しかった。私がした仕事はごく簡単なものに過ぎなかったが、それによってうつむいていた人が少し顔を上げ社会に改めて参画していく……弁護士という仕事のやりがいを感じた瞬間だった。

## 「パブリック=開かれた場」とは

私は東弁の都市型公設事務所である東京パブリック法律事務所に勤務させていただいている。私がこの事務所を選んだのは、自由闊達で明るい事務所の雰囲気もさることながら、この事務所が志す「パブリック=開かれた場」という考えに魅力を感じたからだった。

今の社会では機会均等ということが言われ、その結果としての自由競争と自己責任が喧伝されている。しかし、現実の社会を観察すれば、そうした言葉は傾いた地軸の上で地表をならすようなまやかしのものに思えてくる。事務所から池袋の駅に向かう道を歩いただけで多くの現実が見える。寒さに震えるホームレスのおっちゃんたち、路上に立って客を呼ぶオーバーステイの女性たち、あるいは寂しそうにたむろしている少年たち。今の社会は決して全ての人に開かれているわけではない。

もし、彼ら・彼女らもまた参加し、ともに語り、聴き、考え、手を取り合えるような開かれた場を創ることができれば、この社会はもっと生き生きとするのではないだろうか。より豊穡な社会ができていくのではないだろうか。そんなことを夢想する。

未熟な新人弁護士にできることは多くはないだろう。しかし、自らの活動によって、Aさんのように新たに社会への関わりを見出す人がこれからも出てきてくれるかもしれない。寝不足の目を擦りながら、明日も頑張ろうと思う。